「登山競走回想録」

富士山吉田口旅館組合
組合長　中　村　　修

私が、両親から山小屋をひきついだのは、今から２５年程前になる。
それ迄は両親が山小屋を経営し、登山競走の前夜には大きなヤカンに大量の麦茶を用意し、当日に備えていたことなど。

当時は、今の様に給水ポイントも設けていないため、下界から一気に駆け上って来るので、炎天下の時には汗もびっしょりかき、のども乾きベンチにぐったりとする選手や駆け上ってきた選手に、アルバイト生などに麦茶を配るように言っていたことを思い出す。

その時代の選手の服装もまちまちで、地下足袋を履いて走ってくる人、自分の仕事場のハッピ着てくる人など様々であった。

それにおいても、日本最高峰と言われる富士山、富士吉田市役所を（770 メートル）スタート地点にして標高差３０００メートル、距離にして 21 キロを一気に駆け上る山岳レース、これこそ体力や精神力を鍛えた人でないと、このレースは走破できるものではなく、非常に過酷で困難な山岳レースともいえる。
それだけに富士山頂を極めることが大変難しいといえる。

富士登山競走は、必ずしも整備された道ばかりを走るのと違い、ゴロゴロした火山石の上などを走ることも多く、特に７合目から８合目に至る登山道は、非常に険しい岩場が連続して続き、ほとんどの選手が四つん這いになって登っていく光景が見られる。私が、小屋から外に出てみていると、7 合目の岩場に入ると今迄とは違い険しい岩場となり、足を持ち上げる箇所や階段も多く、その辺で体力を消耗してしまうのか、

小屋の前のベンチには、座りきれないほど選手がギッシリと並び、選手の中には足をついてしまい歩けない人も続出したり、あるいはお腹がすいて動けなくなる方も現れるなど、様々であった。

当時は、完走する為に出来るだけ身軽になって走ろうとする人が多く、水分補給も出来ずお金も持たないで、駄菓子も買うことも出来ずベンチに座り込んでしまう選手も見受けられた。

その頃は、女性選手も少なく、7 合目まで走ってくるのは大変珍しいことであった。

過去の記憶といえば、日本人で凄い身体能力を持った選手が突然現れた事である。

それまでは、1 番を取る選手が比較的年度ごとに入れ替わっていたので、さほど気にも留めていなかった。

しかし、その選手は 10 回も優勝経験を持つ方で、名前は芹澤雄二選手である。

当然ながら、芹澤雄二さんが第 39 回大会（1986 年・昭和 61 年・初出場）で優勝した時もあまり気にも留める事はなかった。

事実翌年には違う人が優勝されているので、毎回のように優勝者が変わっても当然のように思っていました。

ところが芹澤雄二さんも前回負けたことをバネに、第 41 回大会（1988 年・昭和 63 年）では見事優勝する事が出来ました。

それ以降 47 回大会（1994 年・平成 6 年）まで連続して優勝に輝いた、芹澤さんが登山競走に参加した回数は、全部で 13 回（13 年）となり、その内 3 回程優勝は逃がしてしまったものの、見事 10 回優勝され通常の者にはなしえない驚異的な精神力の持ち主ではないかと思われる。

現に今日に於いても、これだけの大記録は未だ破られてはいない。
近年参加人数も増え、山頂コースにおいては、前回の統計だと男女合わせて約２３００人が参加している。

いずれにしても夏山の一大イベント、登山者からも山小屋からも声援の声が聞こえ、毎年この日を楽しみにしている。　　この富士登山競走は私が生まれる前の年（1948 年・昭和 23 年）第 1 回大会が始まり、今年で 73 回大会を迎える。

長きに渡りよくここ迄、継続出来たと関心と同時に
敬意を表したいところである。

これも偏に関係者の努力によって、今日まで継続出来たものと感謝している次第である。　（令和 4 年 4 月 11 日校正）